

家庭学習応援教材

近世の浮世草子 『好色五人女』を読む

西南学院大学 神学部・経済学部 2013 過程の演習 新国語問題集アシスト【古文編】

次の文章は、先代の法事を営む翹屋長左衛門方の様子を描写したものである。これを読んで、後の問いに答えよ。

世の中の年月のたつ事夢まぼろし、はや、過ぎ逝かれし親仁、五十年忌になりぬ。われ長らへてこれまで弔ふ事嬉し。古人の申し伝へしは、「五十年忌になれば、朝は精進して、暮は魚類になして、謡ひ酒もり、その後は弔はぬ事」と申せし。これが納めなれば、少し物入りも厭はず、万事その用意すれば、近所の出入りの娼ども集まり、碗家具・壺皿・平碗・小壺皿・ちやつ（台着き浅皿）まで取り捌き、手毎に拭きて膳棚に重ねける。

ここに、樽屋が女房（おせん）も、「日頃念比なれば、御勝手にて働く事も」と、御見廻申しけるに、かねて、才覚らしく見えければ、「そなたは、納戸にありし菓子品々を縁高（お盆）へ組み付けて」と申せば、手元見合はせ、饅頭・御所柿・唐ぐるみ・落雁・榿・杉楊枝、これをあらましに取り合はす時、亭主の長左衛門、棚より入子鉢を下ろすとて、おせんが頭に取り落とし、うるはしき髪は結目、たちまち解けて、主人、これを悲しめば、「少しも苦しからぬ御事」と申して、かい角ぐりて、台所へ出でけるを、翹屋の内儀、見咎めて気を回し、「そなたの髪は、今の先まで美しくありしが、納戸にて俄に解けしは、いかなる事ぞ」と言はれし。

おせん、身に覚えなく、物静かに、「旦那殿、棚より道真を取り落とし給ひ、かくはなりにける」と、ありやうに申せど、これをさらに合点せず、「さては、よい年をして、親の弔ひの中にする事こそあれ」と、人の気尽くして盛る刺身を投げこぼし、酢にあて粉にあて、一日この事言ひやまず。後は、人も聞耳立てて興覚めぬ。

かかるりんきの深き女を持ち合はすこそ、その男の身にして因果なれ。おせん、迷惑ながら聞き暮せしが、「思へば思へば憎き心中、とても濡れたる袂なれば、このうへは、是非に及ばず、あの長左衛門殿に情けをかけ、あんな女に鼻あかせん」と思ひ初めしより、格別の志、ほどなく恋となり、忍び忍びに申し交はし、いつぞの首尾を待ちける。

注 かい角ぐりて……髪をざっと束ねて巻き上げて

問

本文の内容の説明として最も適当なものを次の1―4の中から一つ選べ。

- 1 商売であれ恋であれ、飽くなき欲望のままに生きている、活気に満ちた町人の生活を賛美している。
- 2 世間では紳士と思われている人でも陰では墮落しきっている、時世の現実を暴いて告発している。
- 3 何人もの相手を取り替えながら恋にうつつを抜かしている、昨今の浮世の愚かしさを皮肉っている。
- 4 あてつけにすぎなかったものがいつか本当の恋に変わってしまう、人の心の不思議を写真している。

【解説】

◇本文の構成

第一段落

先代の法事に近所の女房たちが手伝いに集まり、慌ただしい麴屋の家の様子。

第二段落

おせん（近所の女房の一人）登場。

← 「才覚（＝気が利く）」があるので、納戸で菓子を盛り付けることになる。

← 亭主長左衛門がおせんの頭に入れ小鉢を落としてしまい、髪の毛の結び目がほどけた。

第三段落

長左衛門の女房が見とがめ、納戸で亭主がおせんと浮気していたのではないかと邪推する。

第四段落

おせんは嫉妬されることを迷惑に思ううちに、女房に疑われた腹いせに、本当に長左衛門に言い寄る。

← いつの間にか、おせんと長左衛門は本当の恋に落ちてしまう。

【現代語訳】

（この）世の中の年月の経つことは夢や幻（のよう）で、早くも、お亡くなりになった親父が、五十回忌になった。自分が長生きしてこの五十回忌（の法事）まで営むこと（ができるの）は嬉しい。昔の人が申し伝えたことは、「五十回忌になると、朝は精進（料理）にして、夕方には魚類（の料理）にして、謡をうたい酒盛りし、その後は法要をしない事」と申した。これが最後の法事であるので、少しぐらいの出費はいやがらず、万事その（つもりで）用意をするので、近所の（普段）出入りしている女房たちが集まり、お椀・壺皿・平椀・小さな壺皿・台付き浅皿まで取り出し、手に手に拭いて膳棚に重ねた。

ここに樽屋の女房（＝おせん）も、「いつも懇意なので、お勝手に働くことが（ありましたら）」と、尋ね申し上げたが、以前から、機転が利くように見えたので、「あなたは、納戸にあった菓子の品々をお盆に盛り付けて（ください）」と申すと、（おせんは）手元（にある品々）を見合せて、饅頭・御所柿・唐ぐるみ・落雁・榎（の美）・杉楊枝、これらを大まかに盛り合やす時、（この）亭主の長左衛門が、棚から入れ子鉢を下ろそうとして、おせんの頭に取り落とし、きちんと結った髪の毛の結び目が、あつという間にほどけて（しまい）、主人（の長左衛門）が、これを嘆くと、（おせんは）「ちっとも構わないこと」と申して、髪の毛をざっと束ねて巻き上げて、台所に出てきたのを、麴屋（長左衛門）の奥方が、（それを）見とがめて気を回し、「お前さんの髪は、ついさっきまできちんと結っていたのに、納戸（の中）で急にほどけ（てしまっ）たのは、どういうことか」と言われた。

おせんは、（その）身に（何も）覚えがなく、物静かに、「旦那様が、棚から道具を取り落とすになつて、このようになってしまった」と、ありのままに申し上げるが、（奥方は）いっこうに納得せず、「さては、いい年をして、親の法事の最中に、することもあるのに」と言つて、人が気を使って盛り

付けた刺身を投げ捨て、何彼につけ、一日中この事を言いやめない。(その)後は、人も聞き耳を立ててあきれはててしまった。

このような嫉妬深い妻を持ち合わせるのは、その亭主の身にとって災難である。おせんは、迷惑ながら聞いて過ごしたが、「思えば思うほどに憎らしい(あの女房の)心根、どうせ疑われているのだから、この上は、是非もない、あの長左衛門に情けをかけて、あんな女の鼻をあかして(「あつと言わせて)やろう」と思いはじめた時から、(以前と)全く違う(長左衛門への)思いが、やがて(本当の)恋となり、忍び忍びに言い交わして、いつかよい忍び逢いの機会を待った。

【解答】

4

1 商売についての「欲望」は書かれていない。また「活気に満ちた町人の生活を賛美している」と読み取れるところもないので×。

2 随落しきった「紳士と思われる人」や、それを「暴いて告発」するところもないので×。

3 おせんが翹屋の内儀に嫉妬されたことをきっかけに、長左衛門と恋仲になる話なので、「何人もの相手を取り替えながら」恋をする話ではないので×。

4 長左衛門の嫉妬深い女房に対するあてつけから始まったのに、それがいつの間にか本当の恋になってしまったという本文の内容について、「人の心の不思議を写実している」という説明は○。

【作品(作者)解説】

貞享三年(一六八六)に刊行された浮世草子。お夏清十郎、樽屋おせんと長左衛門、おさん茂右衛門、八百屋お七と吉三、おまん源五兵衛の五つの恋愛事件を描く。すべて当時著名な事件を取り上げたもので、おまん源五兵衛以外はすべて悲劇的結末をとっているが、作中には笑いも織り込まれている。作者は井原西鶴(二六四二〜一六九三年)。江戸元禄期の代表的文学者。好色物、雑話物、武家物、町人物など、大量の浮世草子を刊行。軽妙な文体によって自由な人間性の解放をうたい上げた。